

助っ人たち

赤部 仁利

道北地方に長く住んでいる数十人に、「雪のある冬の生活といったら、どんな光景を思い浮かべますか」と問うてみた。答えは三つに分かれて返ってきた。

一つめは、凍てつく寒さや、うっとうしい豪雪、じっと耐えて暮らす半年間など、苦境との対峙で連想してしまう感覚派タイプ。二つめの答えは、真赤に燃えたストーブ、夜長のテレビ視聴、干魚をつまみに酒のある語らないなど、家の中の思い思いに過ごす光景を印象つけた現実派。そして三番目は、歓声と彩りに溢れたゲレンデ、朝の光に輝く樹氷の撮影、天文字焼きとその助っ人たちなど、雪を親しい友達と考えている行動派とでもいうタイプでした。

雪のある生活という問いかけに對してさえ、北国の人々は、さまざまな感覚を持ち、生活観を形成し、暮らしているんだナアということ垣間みせてくれたのです。

天文字焼きの助っ人たち。私には聞き慣れなかったので、近所の年輩の人に尋ねてみた。なんでも、町おこし行事などがあると、十数人集まっては、主催者顔負けのお手伝いをする若衆たちですよ。いかなれば、町おこし勝手連で、志をかざす正義の味方とでもいうんでしょね。と説明してくれた。

私には、この助っ人たちが、まるで今様鞍馬天狗の集団のように思え、どんな活躍をするのか興味が湧いてきた。

二月十三日。道北の地、名寄の冬のイベントを代表する北の天文字焼きの日であった。いよいよ助っ人たちの出番である。点火は午後七時とのことだった。

北の天文字焼き。道北地方の十四の市町村の境界を線で結んでみると、おおむね「天」という文字にみえてくる。北国に住む人々の連帯感を象徴していると意義づけられている。このため、十四市町村が



略歴

昭和5年生まれ
昭和25年から倶知安、岩見沢農業高校勤務
昭和47年道教委指導主事を経て、ニセコ、
名寄、旭川の各農業高校校長
昭和63年道教委指導参事
平成2年定年退職
その後、旭川実業高校顧問、指導主事
平成4年名寄市教育委員会教育長

ら小さな炬火（たいまつ）を名寄にある神社に集めて、お払いを済ませて、東地区にある太陽の丘めがけてかけあがり点火する。少し神がかったところもあるが、景気づけのイベントにふさわしい企画である。

一一

朝方、雪が心配された天候も、午後にはすっかり落付き、点火される太陽の丘は、白一色の広大な、どっしりとしたキャンパスのように見えた。

午後六時半過ぎ、JR名寄駅北側の広場へ出かけた。すでに四、五百人も集まって、あちこちで、焼肉パーティーに舌鼓を打ちながら、特製の氷コップでビールを傾けていた。

午後七時。地鳴りと同時に、夜空に閃光が走り大きく舞った。天文字太鼓が威勢よく響く。その時、遙かの丘に燈（だいたい）色の炎がゆらぎ、雪面に煙をたなびかせた。一点また一点と数秒の間隔で

火が舞い上がる。少し風があるためなのだろうが動きのある炎が遠目では、太さのとのわかない直線が浮きでてみえる。助っ人たちが、雪原を次々と走り回って点火しているんだナアと推測させてくれる。

丘は大きく変形しており、前面が若干膨れ上がっているのみえ、次第に仕上っていく「天」の炎も、それは見事な筆さばきになってきた。地形を配慮した点火場所にも助っ人たちの気配りがあり、心にくさを感じとらせてくれる。こうして、タテ二百五十メートル、ヨコ百五十メートルの雄大な「天」の文字が北の夜空に浮きあがった時、太鼓が一段と強い音色を轟（とどろ）かせ、威勢のよい掛声とともに群集の中に突入してきた。

千人は超えていた観客からも割れるような拍手や言葉にならない嘆息とも奇声ともつかない思い思いの声が混じり合っていた。天文字の幻想の世界、助っ人たちへの感動に包み込まれた三十分間のドラマが終わった。